

副詞の共起変化の一考察

—モダリティと共起する副詞を中心に—

小池 康

キーワード：陳述副詞、共起変化、推量のモダリティ、断定の形式

1. はじめに

本稿は、副詞とりわけいわゆる陳述副詞における共起関係の変化を構文変化と位置づけ、文献調査より考察するものである。

筆者は、つくば市の公務員宿舎の住人を対象に、副詞の共起に関する調査（以下「小池調査」と呼ぶ）を行なった（小池(1995)）。そこでは、モダリティと共起させた文とさせない文を提示し、それぞれの自然さを求めるという方法を採用した。その結果、調査語は二つの語群に分かれた。一つはモダリティの有無にかかわらず自然さが高いという語群で、もう一つはモダリティの有無にかかわらず自然さが低いという語群であった。この結果より、モダリティを共起成分に持つとされている副詞が、史的に見て、どの程度モダリティを共起成分としているか、もしくはしていないかを見ることにより、副詞の共起関係の変化を知ることができるのではないかと考えたのである。

史的に共起関係の変化を見るという立場から、まず明治期から昭和期の文芸作品（主に小説）に現われた副詞の用例を採取し、そのデータに基づき副詞の共起成分の変化について考察してみることにする。

2. 対象語

本稿では、推量のモダリティと共起するとされる副詞を対象として取り上げる。具体的には、推量のモダリティと共起するとされる副詞—おそらく・たぶん—、および否定推量のモダリティと共起するとされる副詞—よもや・まさか—の4語である。

これらの語は、「たぶん」を除き、小池調査で対象とした副詞である。また、これらの語は、小池調査では、共起成分にモダリティを取る取らないにかかわらず自然であると意

識される傾向にあった。つまり、モダリティと共起するとされる副詞であっても、現在の日常の話しことばレベルでは、モダリティが無くとも許容されているのである。

では、史的に見てどうなのだろうか。現在では推量／否定推量のモダリティ要素と共起するとされる副詞が、史的に見てどのような使われ方をし、またどのような共起成分の使い分けがなされてきたのか、これを見ようとするのが本稿の目的である。

3. 資料

資料は『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』（1995）、『CD-ROM版 明治の文豪』（1997）、『CD-ROM版 大正の文豪』（1997）より、日本人で東京生まれの作家24名の小説（解説等は除く）を使用した。上記三つのCD-ROMには76名の作家（詩人、俳人、評論家は除く）の作品が納められているが、分析の対象を東京生まれの作家に限定したのは、特に明治・大正期の作家で地方出身者の場合、彼らの用いる日本語が出身地の方言の影響を受けている可能性があると考えられたためである。本稿は、副詞の共起における明治期から昭和期に至る変遷を見ようとするものなので、なるべく資料的な均質性を持たせるために、東京生まれの作家に限定して分析した。なお、作者、作品等については、本稿末の付録にまとめてある。

また、参考資料として小池調査を用いる。これは、筆者が1994年につくば市の公務員宿舎に住む16歳から80歳代までの723名に対して行なった調査で、有効回答者数は418名であった。

4. 分析

4.1. 推量のモダリティと共起する副詞—おそらく・たぶん—

「おそらく」と「たぶん」について、辞書類での規定をまとめる[*1]と、この両副詞は、可能性が高いことを推量する様子を表わし、しばしば推量の表現を伴うとされている。日本語学習者を対象とした島本(1989)でも、推量の表現が共起した例を挙げている。また、森田(1989)、飛田・浅田(1989)では、「おそらく」はややかたい文章語で丁寧な文体で用いられることが多いともしている。

文献調査では、「おそらく」は302例[*2]、「たぶん」は126例[*3]見られた。このうち、いわゆる認知的モダリティにおける推量（以下、「推量のモダリティ」とする）に分類される「(ダ)ロウ」類[*4]と共起している例は、「おそらく」で158例、「たぶん」で65例

あり、同じく（否定）推量のモダリティの「マイ」[*5]と共起している例は前者は18例、後者が2例で、両副詞とも推量のモダリティと共起している用例の占める割合が一番高かった。

表1 「おそらく」の用例数

		(ダ)ロウ	マイ	カモシレナイ	ニ違イナイ	ラシイ	ト思ウ	断定	一語文	その他	計
明	四迷	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	漱石	31	3	-	-	-	-	1	-	-	35
	一葉	-	2	-	-	-	-	-	-	-	2
	有島	9	1	1	1	-	-	-	-	1	13
	実篤	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	谷崎	11	1	1	1	-	1	-	-	1	16
	長与	1	-	-	-	-	-	2	-	-	3
	芥川	17	4	-	2	-	-	-	-	-	23
	石川	9	1	-	-	-	1	1	-	10	22
	堀	6	-	1	2	-	-	1	-	1	11
大正	大岡	1	1	-	-	-	-	4	-	-	6
	中島	2	1	-	-	-	-	-	-	-	3
	池波	4	1	-	-	-	-	-	1	1	7
	遠藤	10	1	2	4	-	-	-	-	3	20
昭和	三島	7	1	-	3	-	3	14	-	5	33
	星	1	-	-	2	-	-	-	-	-	3
	北	18	1	-	6	4	-	2	-	11	42
	吉村	3	-	-	-	-	3	-	-	1	7
	曾野	10	-	1	3	-	7	3	-	2	26
	塩野	3	-	-	-	-	1	1	-	-	5
	椎名	5	-	-	-	-	-	-	-	1	6
沢木	8	-	-	2	-	-	6	-	1	17	
計		158	18	6	26	4	16	35	1	38	302

表2 「たぶん」の用例数

		(ダ)ロウ	マイ	カモシレナイ	ニ違イナイ	ラシイ	ト思ウ	断定	一語文	その他	計
明	四迷	-	1	-	-	-	-	-	-	1	2
	露伴	2	-	-	-	1	-	-	-	-	3
	漱石	8	-	-	-	-	-	-	-	-	8
	谷崎	10	-	-	1	1	1	1	-	1	15
	長与	4	-	-	-	-	-	1	-	-	5
	芥川	5	-	-	-	-	-	-	-	1	6
	石川	7	-	-	-	1	-	-	-	1	9
	大岡	12	-	-	-	-	-	1	-	1	14
大正	遠藤	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2
	三島	-	-	1	-	3	2	8	1	1	16
昭和	北	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	曾野	8	1	-	-	-	11	3	2	7	32
	椎名	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
	沢木	6	-	-	-	-	1	2	-	3	12
計		65	2	1	1	6	15	17	3	16	126

具体例としては、以下のようなものが挙げられる。

1. 大抵の人は恐らくその年月の間にそう云う生活から跳ね返る力を失ってしまうだろう。(小さき)
2. 所々まだらに赤くなっているのは、恐らく踏まれた時の痕であろう。(羅生門)
3. 私はなんと挨拶したかハッキリ覚えていませんが、多分口の中でもぐもぐやらせてただけだったでしょう。(痴人)
4. たぶんあてつけたつもりだろう。(焼跡)
5. 胡地こちにあつて單子せんごと刺違えたのでは、匈奴こつらは己等おのれらの不名誉を有耶無耶うやむやの中に葬つて了うこと必定故、恐らく漢に聞えることはあるまい。(李陵)
6. 今頃は多分いまい。(太郎)

また、「ト思フ」[*7]や「気ガスル」などのいわゆる文末思考動詞[*8]と共起している例は、「おそらく」が16例、「たぶん」が15例あった。この形式もモダリティと見なしてよいであろう[*9]。

7. ～、おそらく引退生活に入ってからと思われるが、～(陥落)
8. たぶん大丈夫だと思うんだ。(太郎)

「おそらく」における「マイ」18例のうち、16例は三島由紀夫の作品以前に見られた。逆に、「おそらく」における文末思考動詞は三島由紀夫以前の作家に2例、また「たぶん」においても三島以前では谷崎に1例見られるのみである。これらのことから、三島を境として、「おそらく」「たぶん」と共起するモダリティに変化が起こった可能性が考えられる。

また、「おそらく」では、「ニ違イナイ(相違ナイ)」といういわゆる認識的モダリティにおける蓋然性判断のモダリティ(以下「判断のモダリティ」とする)を共起させた例が26例見られた(「たぶん」では谷崎で1例見られるのみ)。この例は、有島武郎以降、本調査中もっとも若い沢木耕太郎にまでほぼ通して見られることから、明治以降現代まで使われている共起成分という可能性がある。また、他の判断のモダリティである「カモシレナイ」や「ハズダ」などと共起している例も見られたが、「おそらく」にしる「たぶん」にしる、出現数は多くはなかった。

先の辞書類での規定から考えて、モダリティ(特に推量の)を伴うのが「おそらく」と「たぶん」の一般的な用法であるとする、それは小説における用例においても実証されたことになる。しかし、すべての例が推量のモダリティと共起しているわけではなく、こ

のようなモダリティと共起していない例（以下、「断定の形式」と呼ぶ）が、「おそらく」では35例、「たぶん」では17例と各語の全用例数の10%以上の割合で見られた。

9. これらの屍体の前身たる日本の敗残兵は、恐らく米兵が通過した後にこの村に現われ、掠奪して住民の報復を受けたのである。（野火）
10. 柏木の言ったことはおそらく本当だ。（金閣寺）
11. 自分はおそらく、将来榆病院の中堅となる金沢清作か葦沢勝次郎の嫁となる運命にあるのだ。（榆家）
12. その言葉に恐らく嘘はない。（一瞬）
13. 人間は多分そういう風に出て来ているのである。（金閣寺）
14. 「高校へ行ったら、多分定期もてる」（太郎）
15. うちの社長はケチだからそれはやらないよ。たぶんハンコだな、おれのみるところは……」（新橋）
16. たぶん、リミットを切ってるよ」（一瞬）

断定の形式との共起例は、表1および表2より、三島由紀夫に限り用例数が突出していることがわかる。これは、作家の個人的な文体的特徴として位置づけられよう。三島を除けば、「おそらく」が断定の形式と共起している例は、多寡はあるものの、明治期以降比較的よく見られる。しかし、「たぶん」では、三島を除外しても、三島以降の、特に曾野綾子以降の昭和生まれの作家において、用例数が増加している。今回の調査では、対象とした作家・作品が少ないので確とした言及は避けるが、どうやら三島以降、特に「たぶん」における用法に、断定の形式を共起成分に取りうるという使用意識が定着していった可能性があると考えられる。

森田(1989)などでは、文体的な違いとして、「おそらく」のほうが「たぶん」よりも丁寧な文体で用いられることが多いとしている。確かに、採集した用例では「おそらく」のほうが丁寧な表現と共起している用例数が多かったが、明確な使い分けがなされていないとは言えない。つまり、「おそらく」でもくだけた言い方と共起している場合（例文17・18）もあれば、「たぶん」が丁寧度の高い表現と共起している場合（例文19・20）も見受けられるのである。

17. おそらく、此処だろうとおもってな。（剣客）
18. 「恐らく何でもないよ」（太郎）
19. 「もうわからないでしょう、多分」（榆家）

20. しかし、文化放送がやるつもりなら、多分できます」(一瞬)

最後に、小池調査の結果を参考までに挙げておく。2で述べたように「たぶん」は調査項目として設定しなかったので、「おそらく」のみを挙げる。小池調査における「おそらく」は、以下のような項目で調査し、かっこ内の結果[*10]が得られた(囲み部は、調査用紙では下線である)。

21-1. 「今日はおそらく雨が降るだろう。」(1.65)

2. 「今日はおそらく雨が降る。」(1.94)

3. 「今日はおそらく雨が降らないだろう。」(1.86)

4. 「今日はおそらく雨が降らない。」(1.95)

「ダロウ」というモダリティの有無にかかわらず、許容度は高かった。このことより現代の日本語使用者には、「ダロウ」というモダリティと共起させなければならないという意識はそれほど強くは働いていないことがわかる。

4.2. 否定推量のモダリティと共起する副詞—まさか・よもや—

4.1. と同じ辞書による規定では、両副詞とも、真実であったり、実現したりする可能性が非常に低いという判断を表わし、後ろに否定の表現を伴い、意志や推量の言い方を要求する副詞としている。島本(1989)では、「マイ」や「ナイダロウ」と共起している用例が

表3 「まさか」の用例数

		ナイダロウ	マイ	ナイ	トハーナイ	トモーナイ	ニハーナイ	ニモーナイ	一語文	その他	計
明	四迷	2	7	5	1	1	-	1	2	8	27
	紅葉	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
	露伴	-	2	3	-	1	-	-	-	-	6
	漱石	9	5	2	-	3	1	3	5	1	29
	有島	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
	実篤	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
	谷崎	4	2	2	3	-	1	-	-	4	16
	長与	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
治	芥川	2	5	1	2	-	-	-	2	2	14
	石川	5	2	-	1	-	-	-	4	3	15
	大岡	1	-	-	-	-	-	-	1	1	3
	中島	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
大正	遠藤	-	1	1	-	-	-	-	-	-	2
	三島	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
	星	1	-	-	-	-	-	-	1	-	2
昭和	北	5	2	-	4	1	-	2	-	5	19
	曾野	3	2	-	-	-	-	-	9	2	16
	塩野	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	椎名	-	-	-	1	-	-	-	1	-	2
和	沢木	1	-	-	5	-	-	-	6	-	12
	計	34	28	15	20	6	3	6	31	27	170

挙げられている。

文献調査では、「まさか」の用例は170例[*11]、「よもや」は24例であった。

「まさか」では、ほぼ明治期の作家から昭和期の作家まで否定推量の形式「マイ」(28例)や「ナイダロウ(ナカロウも含む)」(34例)と共起している用例が多く見られ、先の辞書類の規定と一致している。

22. 小夜さんだってまさかあんな梅干老爺おやじ ほれ ちまに惚きづかいッ了う気遣は有るまい。(其面影)
23. 「まさか火傷をするようなことはあるまいね」(蜘蛛)
24. 明倫ともあろうものが、まさかそのようなジャーナリスティックな反応は示すまい、
と思っていたのである。(太郎)
25. 「だって、まさか運動会の計測掛になって得意になる様な方でもないでしょう」
(三四郎)
26. まさか荷物にこだわる銀二郎でもないだろう。(焼跡)
27. あなたはまさか甘く考えていなさるのではないでしょうね?(楡家)

また、明治期に特徴的な共起成分としては、断定的な否定の形式「ナイ(ズも含む)」がある。

28. ～、まさか跡を慕って往かれもせず、萎れて二階へ狐鼠こもこも々々と帰った。(浮雲)
29. まさかこれ程でも無いが、如何にも奇険だ。(太公望)

これは四迷から漱石までの作家に見られるが、それ以降の用例は少なく、特に三島以降には用例が見出せなかった。これとは逆に、「まさか…トハ～ナイ/ナカッタ(+ラシイ・ダロウなど)」という形式は、谷崎以降よく見られる共起の形式である。

30. クレオパトラがどんなに伶俐な女だったとしたところでまさかシーザーやアントニーより智慧ちえがあったとは考えられない。(痴人)
31. まさかこんな事が起ろうとは妾わたしだって考えていた訳じゃないけれど、～(青銅)
32. まさか走ってくるとは予想もしなかった。(新橋)
33. エディはまさか私が一緒に走るつもりだとは思ってもいなかったらしい。(一瞬)

小池調査では、

- 34-1. 彼がまさか失敗することはない。(2.46)
2. 彼がまさか失敗することはないだろう。(1.80)

の二種類の文について調査し、結果はそれぞれかつこ内の通りとなり、有意差(p<5%)も見られた。これより、「ダロウ」という推量のモダリティが明示されているほうが自然と

意識される度合いが高いことがわかる。モダリティを共起させていない場合は不自然というほどの意識を持たれているわけではないが、相対的に見てモダリティを共起させていたほうが自然と意識される傾向が強いと言える。しかし、文献調査より採集された「ナイ」はそのほとんどが否定の助動詞であり、小池調査のような形容詞の「ナイ」が用いられている用例は少なかった。その意味で、小池調査の結果を一般化することはまだできないことを断っておきたい。

表4 「よもや」の用例数

		ナイダロウ	マイ	ナイ	その他	計
明治	紅葉	1	-	-	-	1
	漱石	2	2	-	1	5
	一葉	-	2	1	2	5
	有島	-	1	-	-	1
	谷崎	2	1	-	-	3
	芥川	-	4	-	2	6
	石川	-	-	-	1	1
大昭	池波	-	1	-	-	1
	椎名	-	-	1	-	1
計		5	11	2	6	24

次に「よもや」は、出現例は少ないが、出現例の24例中16例で否定推量の「マイ」(11例)もしくは「ナイダロウ」(5例)という形式と共起しており、これも先の辞書類の規定と一致した結果となった。具体的な用例としては、以下のようなものが挙げられる。

35. よもや私が何をおもふかそれこそはお分かりに成りますまい、(にごりえ)
36. よもや来ない事はあるまいと思うけれど、～(羅生門)
37. ねえ、貴方、よもやお忘れは無いでせう。(金色)
38. 寝間着一枚で放ったらかして来たのだから、よもや何処へも出られる筈はないだろう。(痴人)

また、否定(の断定)の形式「ナイ」と共起している例が2例あった。

39. よもや只事では無いとその頃に聞きしが、(にごりえ)
40. そんな中年親父のような気恥ずかしいことをよもややるわけはない、と思いながらも、自分はいままさしくそうしてしまったのだった。(新橋)

上記の例が、一葉と椎名という生年がほぼ70年近く離れた両者の作品のみに1例ずつ見られたということから考えると、「よもや」の一般的な用法とは言い難い。しかし、小池調査の結果では、否定の形式「ナイ」のみと共起させた調査文の許容度は決して低くはなかった。

- 41-1. よもや倒産するようなことはない。(2.04)
2. よもや倒産するようなことはないだろう。(1.73)

この結果より、文献調査では否定推量のモダリティを共起させた例が一般的であったが、日本語使用者にしてみると否定推量のモダリティの有無はさして「よもや」の用法に影響を与えるものではないと考えていることがうかがえる。

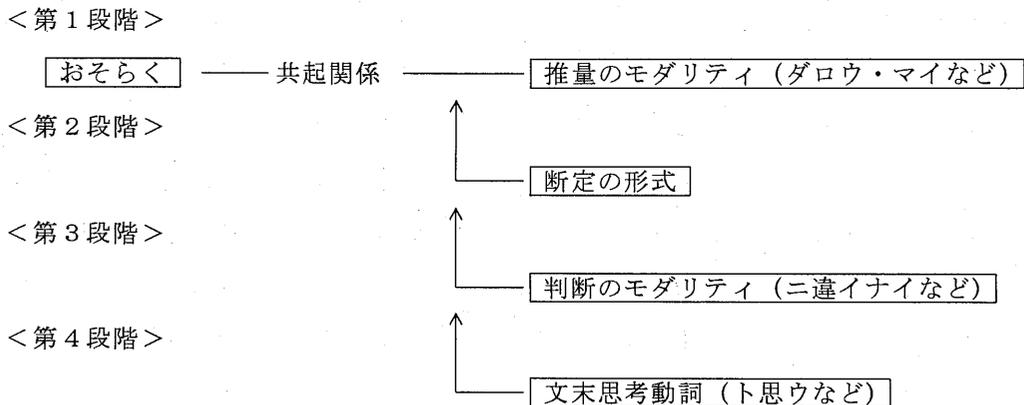
4.3. 副詞の共起変化の図式化

最後に、本稿で取り上げた四つの副詞について、その共起変化について考察を加える。

まず筆者は、副詞の共起変化について以下のような可能性を考えた。すなわち、陳述副詞はそもそもその副詞固有の意味を持ち、これにモダリティが共起することで当該の副詞の意味がより明確になった。しかし、当該の副詞の意味に、本来共起成分が負うべきであったモダリティの意味が内包されはじめ、副詞固有の意味が意識されなくなると、あえて明示的にモダリティを後続させなくともよいという意識が生まれ、本来共起すべき形式を必ずしも共起させなくなる。これにより、共起成分の選択に幅ができて、さまざまな形式と共起する用例が出てきた、と考えてみたのである。

このような見通しの下で、前節までの分析を整理する。まず、「おそらく」は図1のようになるであろう。

図1 「おそらく」の共起変化



これは「おそらく」の共起成分の変化を図にしたものである。図中の各段階への移行は、表1において各形式（「その他」は除く）が一作家に2例以上出現し、さらに複数の作家に用例が見られた場合を設定している（以下同）。まず、第1段階は「おそらく」が推量のモダリティのみと共起関係を結んでいたことを示す。しかし、第2段階になると、「お

そらく」自体に推量というモーダルな意味も内包されているという意識が生じ、推量のモダリティと共起しない例（断定の形式）が現われる。そして、このように共起成分が推量のモダリティのみという構文的な制約が崩れると、第3段階の判断のモダリティや第4段階の文末思考動詞というように、いろいろな形式と共起するようになったのである。

注意すべき点は、これらの共起成分が漸次入れ替わっていくのではなく、新たな共起成分が累加していくということである。

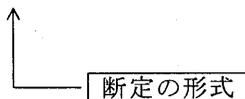
次に、「たぶん」は図2のようになろう。

図2 「たぶん」の共起変化

<第1段階>

「たぶん」 ——— 共起関係 ——— 「推量のモダリティ (ダロウなど)」

<第2段階>



「たぶん」は、「おそらく」に比べ、「マイ」や「ニ違イナイ」といったモダリティと共起した例があまり見られず、また文末思考動詞についても曾野綾子の11例という突出した出現数を除くと用例は多くはなかった（この曾野の用例数は、曾野の文体的特徴として位置づけられるだろう）ので、段階を設定していない。

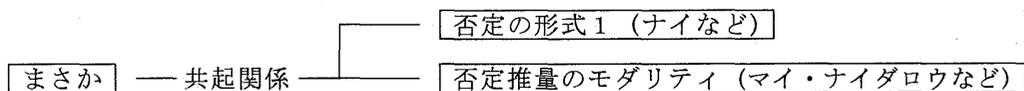
「たぶん」も「おそらく」と同じように、推量のモダリティと共起することが一般的であったものが、「たぶん」という語彙自体にモーダルな意味も含まれているという意識が生じ、必ずしも推量のモダリティを共起させなくともよいという意識となり、その結果共起成分の制約が崩れた。「たぶん」では、「おそらく」ほど共起成分の段階が多くはないが、第2段階までの共起成分の変化は「おそらく」と同じく共起成分が累加していくパターンなので、今後「たぶん」も判断のモダリティや文末思考動詞と共起するような例が多くなっていくかもしれない。

否定推量のモダリティと共起する副詞について見ると、まず「まさか」は図3のようになろう。

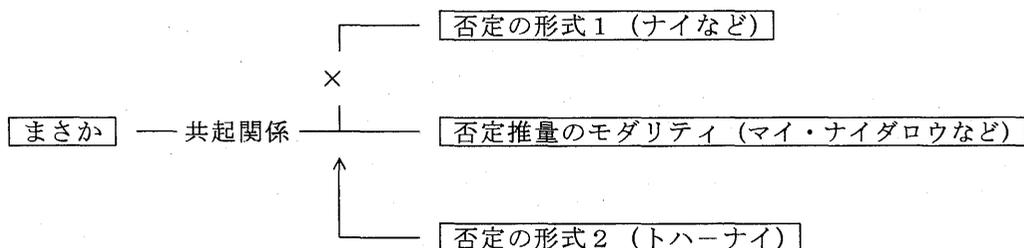
4.2. でも指摘した通り、「まさか」は否定推量のモダリティと共に否定の形式「ナイ」とも共起関係にあった。しかし、時代が下るにつれ「ナイ」のみと共起する例は減少し、「トハーナイ」という新たな否定の形式と共起する例が増えてきた。これはまったく異な

図3 「まさか」の共起変化

<第1段階>



<第2段階>

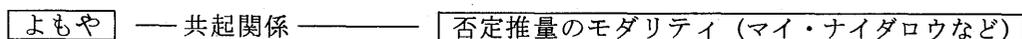


る領域からの新たな形式の追加ということではなく、それまでの共起成分の形式「ナイ」に新たな形式「トハ」が付随して、「まさか」と新たな共起関係を持つようになったものと言えよう。

最後に「よもや」であるが、これは図4のようになるだろう。

図4 「よもや」の共起変化

<第1段階>



「よもや」は、表4を見ても24例中22例が明治期生まれの作家に見られたものであり、その結果を踏まえると図4が導かれよう。しかし、この「よもや」は、大正・昭和生まれの作家の作品にはほとんど用例が見られないことから、文章語レベルにおいてもその使用が衰退してきているのではないかと考えられる。意味的にも、用法的にも「まさか」と類似しているため、「まさか」一語に収束してきているのかもしれない。

5. おわりに—今後の課題

本稿では、推量のモダリティと共起する副詞に焦点を当て、史的側面から共起成分の変化について考察した。今回は、「おそらく・たぶん・まさか・よもや」の4語について取

り上げ、その共起成分の変遷について考察したが、本調査の資料数が足りないことは否めず、今度資料数を増やしてさらに考察を進めていきたい。また、「きっと」や「さぞ」などの推量のモダリティを共起成分にとると考えられる副詞も対象となり得るし、推量のみでなく、比況や願望など他のモダリティと共起する副詞も対象とし、言語変化という大きな枠の中での陳述副詞の構文的な変化について考察していく必要がある。

本稿では、東京出身者の作家のみを対象としたが、地方出身の作家との比較も興味深い仮題ではあるだろう。ただ各方言別の時代的な変化も検証していかなければならない点で難しさもあるだろうが。

注

- *1 用いた辞書類は、森田(1989)、飛田・浅田(1994)、『使い方の分かる類語例解辞典』(1994)である。
- *2 「おそらく」「恐らく」の両形式で検索した。なお、「おそらくは」は除外してある。『日本国語大辞典』によると、近代において「蓋く」という表記の用例が見られたので、これも併せて検索したが、用例は検出できなかった。
- *3 「たぶん」「多分」の両形式で検索した。なお、「多分に」は除外してある。
- *4 「(ダ)ロウ」類には、「ロウ」「ダロウ・ダッタロウ」「デアロウ・デアッタロウ」「デシヨウ」「ヨウ」を含む。
- *5 「マイ」には否定推量と否定意志の意味があるが、文献調査の結果はすべて否定推量であった。
- *6 「その他」は、表1から表4を通して、言い差しの形や判断の付かない例などである。
- *7 「ト思ワレル、ト思ツタ」という形式も含む。これには、「まだ会社では恐らく誰も気がつくまいと思っていたのに、～」(谷崎)のように、「ト思ウ」の前にモダリティがある場合は含んでいない。
- *8 森山(1992)より。砂川(1987)では「引用動詞」と呼んでいる。なお、表1、表2では、「ト思ウ」に代表させて示した。
- *9 砂川(1987)では、これらの形式が断定的なニュアンスを避けようとする「婉曲のムード」の働きがあるとしている。また、仁田(1991)にも同様の記述が見られる。
- *10 数字は調査の平均値を示している。小池調査は、各項目を「1.自然」「2.やや自然」「3.やや不自然」「4.不自然」の4つのカテゴリーに分け、被験者が適当だと思う数値に丸を付けてもらうという方法を採用した。そこから得られた平均値は、1に近いほど自然と意識する傾向にあり、4に近いほど不自然と意識する傾向にあることを示している。
- *11 『日本国語大辞典』の補注によると、近代、「真箇」「真処」「正可」「真逆」「豈」などの漢字もあてたとあり、また当辞書の用例に「有繫」という当て字の例も見られたので、これらも併せて検索したが、用例は見出せなかった。

参考文献

- 安達太郎(1997)「副詞が文末形式に与える影響」『広島女子大学国際文化学部紀要』3
『使い方の分かる類語例解辞典』(1994)、小学館
- 小池 康(1995)『いわゆる副詞の呼応の実態に関する社会言語学的研究』、平成6年度修士論文
- 島本基 編(1989)『日本語学習者のための副詞用例辞典』、凡人社
- 砂川有里子(1987)「引用文の構造と機能—引用文の3つの類型について—」『文藝言語研究』13
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房
- 梶 郁(1991)「副詞論の系譜」『副詞の意味と用法』、国立国語研究所
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』、東京堂出版
- 三宅知宏(1994)「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』63-11
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』、角川書店
- 森山卓郎(1992)「文末思考動詞『思う』をめぐって—文の意味としての主観性・客観性—」
『日本語学』11-8

付録—作者・生年・作品一覧—（下線は本稿での引用作品を示す）

- ・二葉亭四迷(1862)：『平凡』『浮雲』『其面影』
- ・尾崎紅葉(1867)：『金色夜叉』
- ・幸田露伴(1867)：『太公望』
- ・夏目漱石(1867)：『吾輩は猫である』『三四郎』
『彼岸過迄』『こころ』
- ・樋口一葉(1872)：『にごりえ・たけくらべ』
- ・有島武郎(1878)：『或る女』『惜しみなく愛は奪う』
『小さき者へ・生まれ出づる悩み』
- ・武者小路実篤(1885)：『友情』
- ・谷崎潤一郎(1886)：『痴人の愛』
- ・長与善郎(1888)：『青銅の基督』
- ・芥川龍之介(1892)：『羅生門・鼻』『地獄変・偷盜』
『蜘蛛の糸・杜子春』『奉教人の死』『河童・或阿
呆の一生』
- ・石川 淳(1899)：『残跡のイエス』
- ・堀 辰雄(1904)：『風立ちぬ・美しい村』
- ・大岡昇平(1909)：『野火』
- ・中島 敦(1909)：『李陵・山月記』
- ・池波正太郎(1923)：『剣客商売』
- ・遠藤周作(1923)：『沈黙』
- ・三島由紀夫(1925)：『金閣寺』
- ・星 新一(1926)：『人民は弱し 官吏は強し』
- ・北 杜夫(1927)：『検家の人々』
- ・吉村 昭(1927)：『戦艦武蔵』
- ・曾野綾子(1931)：『太郎物語』
- ・塩野七生(1937)：『コンスタンティノープ
ルの陥落』
- ・椎名 誠(1944)：『新橋烏森口青春篇』
- ・沢木耕太郎(1947)：『一瞬の夏』